

大畑凜著（青土社、2024年）

闘争のインターセクショナルリティ 森崎和江と戦後思想史

君島 朋幸*

赤と黒、直線と曲線と円とが重なり綾をなし、僅かにざらつき、どこか版画的色彩もとい陰翳をまとう書物がここに上梓された。『非所有の所有』『闘いとエロス』復刊時に精緻な解説を寄せた大畑凜氏による、森崎和江研究待望の一冊である。

近年復刊が相次ぎ、再評価の機運が高まっていた2022年6月、森崎が世を去ったことは記憶に新しい。没後ただちに編まれた『現代思想』特集号に寄せられた論考の数々が物語っていたのは、かの女が遺したテキストの、目を見張るほどの多彩さであった。しかし、いや、その多彩さゆえにというべきか、かの女の著作を専門的に扱った研究は存外に少なく、水溜真由美を筆頭に、ブレット・ド・バリー、茶園梨加、佐藤泉などの仕事に限られてきた。その点で本書は稀有に違いないのだが、さらに、森崎テキストが湛える思考の強度を個人の資質にのみ帰する評伝的記述とも趣を異にする点においてこそ、その独創性を評価すべき書物となっている。

本書冒頭、著者は書く——ある思想を〈現在〉という地点から継承することは、いかなる営みでありうるのか、と。対象とするのは、森崎のキャリアの初期に位置する筑豊時代（58～78年）のテキストと、その方法論たる「聞き書き」である。これは、かの女が他者の〈わからなさ〉と対峙した際に何度も立ち戻る歴史的現場としての〈筑豊〉から案出されたスタイルでもあり、他者に自らを開いていく態度そのものといってよい。そして、この「聞き書き」の分析の視座として導入されるのが、主題に採用されている「闘争の交差性」である。本書の重要な参照先となるアンジェラ・デイヴィスに従えば、この概念は、レイシズム、セクシズム、グローバル資本主義、産獄複合体といった暴力的抑圧の諸相を注視し、他の闘争との連続的な水脈を掘り起こすものである。これを踏まえ

た本書が、具体的な運動史との綿密な照応のもと分析するのは、ときにマスキュリンで暴力性を帯びがちであった〈集団〉や闘争の原理を、森崎自身の現実や周囲の女性たちとの出逢いから問いに付し、それを全き別様の水平的な共同＝協働性に向けて再構成するために選び取った〈書く〉という動力である。これにより、副題にある「戦後思想史」も、労働力合理化の歴史的必然性を説く政局に抗う反時代的姿勢をこそ森崎のテキストに読む著者の手で、これまでにない姿で縫り合された〈現代〉への水脈として綴られることになるだろう。以下、各章の概要である。

第一章「翻訳としての聞き書き——『まっくら』というはじまりについて」では、谷川雁との共同生活を開始した筑豊という場と、『サークル村』のスタート、そこでの女たちとの出逢いをもとに、「聞き書き」によって著された『まっくら』（61年）が読解される。地上とは異なる炭坑内のエロスや人間関係を記録する「聞き書き」における、とりわけ他者の〈わからなさ〉を抹消しない倫理的次元の翻訳行為としての〈書く〉の思想的可能性が検討される。

第二章「非所有を所有する、あるいは女たちの新しい家」では、『非所有の所有』（63年）が書かれた時期を中心に、大正行動隊による強姦殺人事件の衝撃をはじめ、マルクス主義用語を援用した所有形態の問題に引きつけながら、これを女たちの現実から照射し変形させていく森崎の〈非所有／被所有〉をめぐる錯綜した議論が丹念に辿られていったのち、女たちの新たな共同性としての〈家〉が考察される。

第三章「流民を書く、土地とともに書く——労働力流動化と〈運動以後〉の時代に」では、60年代後半～70年代前半の、国内エネルギー転換による労働力流動化・合理化と炭坑閉山、そして三井

* 一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程

三池労働闘争といった文脈のなかで、本書の鍵概念となる〈流民〉という想像力と、〈集団〉の論理として書かれた『奈落の神々』(74年)が中心的に論じられる。

第四章「抵抗の地図——沖縄闘争と筑豊」では、「おきなわを考える会」とミニコミ誌『わが「おきなわ」』が取り上げられる。施政権返還(「本土復帰」)を控えた沖縄における／対する言論空間のなかで、「筑豊—北九州—沖縄—与論島—朝鮮—倭寇(海)」をつなげていく(中略)森崎による思索の足跡」から導出された〈地図作成法〉(222頁)の一端が示される。

第五章「「ふるさと」の「幻想」——流民としての「からゆきさん」をめぐる」では、アジア侵略と女性の性的搾取といった、性、階級、民族という三点の輻輳と矛盾に向き合う主著『からゆきさん』(76年)が、先の〈流民〉の視座から照射され、故郷と「ふるさと」の乖離や「アジア体験」をめぐる葛藤した文体が読み解かれていく。

第六章「方法としての人質——あるいは「自由」をめぐる」では、「二つのことば・二つのところ」(68年5月)等の時期に僅かに用いられた「人質」という言葉を、金嬉老事件や植民地朝鮮における性的緊張といった森崎の経験と交差させつつ論ずることで、〈流民〉として〈集団〉を求め続けた森崎の「思想的な〈方法〉——あるいは方法的な思想」(270頁)としての「人質の自由(292頁)」(「不自由さを新たな関係の自由へと拓いていった方法」(311頁))までが論じられる。

終章「森崎和江を書き継ぐ」では、森崎の読み手を介して「森崎のように」あるいは「森崎とともに」思考する〈現在〉が示される。特に、植民地主義の極致であるイスラエルによるガザ侵攻と大量虐殺への言及など、著者の問題意識と森崎が記してきた思想の道筋とが、今一度「闘争の交差性」

として確認される。

最後に簡単な質問を投げたい。現在著者は、谷川や上野のみならず金時鐘、黒田喜夫といった詩人らを取り上げ、森崎の綴る〈流民〉との比較分析に着手している。しかし本書では、森崎思想の鍵語となる「裂け目」「虹」「筋肉」「火」等が詩的表現として言及されるが、当の森崎の詩作品に対する考察がなかったことが惜しまれる。ときに重なり、ときにズレていくこの〈流民〉といった同時代的表現が、詩人らの手で、他ならぬ詩として書き留められているのであれば、詩の分析はやはり必須となろう。佐藤泉が指摘する森崎の言語論や、翻訳の問題系もこの点に関わるだろうし、そうした作業を経ることで「闘争の交差性」という視座も一層輝くように思われた。その点、本書の対象時期と重なる、森崎の詩集『さわやかな欠如』(64年)等は、どのように読まれうるのだろうか。

他にも隣接領域の〈民衆〉〈群衆〉研究との接点も気になったが、もとよりこうした注文は、本書の瑕疵をあげつらうものでは決してない。戦後思想・文学、ポストコロニアル、フェミニズム等の諸運動体や研究領域を鮮やかに繋ぐ、本書の多脈的な回路ゆえのものである。今後本書は、森崎研究にとどまらず、インターセクショナルリティを思考・実践する研究や運動現場において、〈私たち〉というコレクティブのありうべき〈現在〉を示す〈地図〉として何度となく参照されるに違いない。

参考文献

- 水溜真由美, 2013, 『『サークル村』と森崎和江——交流と連帯のヴィジョン』ナカニシヤ出版。
 佐藤泉, 2023, 『死政治の精神死——「聞き書き」と抵抗の文学』青土社。
 大畑凜, 2025, 「森崎和江の流民論とその時代、あるいは現在について」『社会文学』(日本社会文学会) 第61号: 20-33。